

中東における国家 ——〈民族国家〉からウンマ的共同体へ——

黒田美代子

I

中東世界の大半の地域では、19世紀から20世紀にかけて民族主義運動と定義された動きが展開され、その直接的、間接的成果として国家の独立が達成された。こうして誕生した国家は、近代に成立した他の国家と同様に、近代西欧で生れ形成された〈民族国家 (Nation State)〉¹⁾の枠組を踏襲し、その体裁を一応整えたのである。中東においてこの時期に成立した国家は、世界史的文脈の中で〈民族国家〉として誕生したのであったが、それにもかかわらず当初から当該地域の他の国家との連邦、合邦を志向し、連合へのさまざまな動きを展開し続けている。例えば古くはナセルの試みたエジプト・シリア連合、カッザーフィーによる近隣諸国との連合の試み、あるいは経済協力中心型とはいえ統合への動きを底流に秘めたGCC等々、近・現代中東世界のこうした潮流は連綿と続けられているのである。

他方、中東世界の心臓部パレスティナに、民族主義運動の果実、終着点として国家樹立を達成したシオニスト・イスラエルは、中東諸国とは正反対の動きを示している。イスラエルは執拗に民族国家としての枠を強化し、きわめて〈ナショナル〉な国家を堅固に維持し続けることに全精力を傾けているように思われる。

中東世界における統合への動きを活火山の如く内に秘める既存国家と、ナショナルなものに固執するあまり、きわめて排他的な国策を推進するイスラエルとののはざまで、PLOは1988年パレスティナ独立国家樹立へ向けて第一歩を踏み出した。これまでのところこの独立国家が、いわゆる民族国家を目指すのか、あるいは既存の枠組を踏襲しながらもこれまでの中東型国家と同じくナショナルな枠を越えて統合へ向う視座を含む国家を目指すのか、必ずしも明確な青写真は示されていない。

イスラエルによるヨルダン川西岸およびガザ占領に終止符を打ち、40余年にわたる紛争解決への道が、今日ほど具体的かつ実現可能な射程をもって明示されたことはない。長期間におよぶ広範な民衆運動であるインティファダは、半恒久化した占領の下での苛酷な状況から生れたものであり、抜本的解決なしには限りなく継続されざるを得ないことを内外に示した。国家独立宣言は、インティファダの闘争の直接の結論であり、かつ現実的な問題解決の突破口である。たしかにその実現への道は、その後の経緯が示すように決して平坦なものではない。ただし国際政治の舞台では、これまでの自国の利害追求、あるいは弱肉強食による問題解決等の旧態依然の潮流は、徐々に転換を迫られつつある。

イスラエル占領下での20余年の歳月、日々強化される抑圧に抗して立ち上がったパレスティナの民衆は、3年目を迎えるインティファダの続行により、新しい段階への準備を完了させようとしている。1988年11月のPLOによるパレスティナ国家樹立宣言は、インティファダにより準備され、実体となった国家の名のりをあげたということである²⁾。これまでパレスティナ解放運動は、一般的に民族運動として規定されるのを常としているため、この宣言によりパレスティナ国家が〈民族国家〉として第一歩を踏み出すことになるとする暗黙の了解が成立しているように思われる。

パレスティナ解放闘争は、19世紀以降ヨーロッパの強い影響を受けた中

東世界において顕著となった民族運動の系譜³⁾を継ぐ運動として位置づけられていた。たしかに近代中東における独立闘争は、植民地主義支配下で闘われることが多く、それゆえに自らの解放達成の手段として〈民族〉の解放を掲げて展開された。同時にヨーロッパでの着実な近代化を目のあたりにし、また世界的規模に及ぶ覇権を手中にする西欧列強に隣接するこの地域では、さまざまな近代化の試みがオスマーン帝国自らの手でなされていた⁴⁾。しかし依然として前近代的な地位に甘んぜざるを得ない状態が続き、この地域の低迷からの脱皮が広大な帝国のあちこちで模索された。近代と前近代が複雑に入り組んでいる世界的状況の下でこの地域における前近代的な壁を打破するためには、〈民族〉という仮設的枠組が必要とされたのである。こうした現象は中東世界に限らず第三世界においても広くみとめられるところである。ところで民族としての自覚はここでは部分的かつ経過的であり、それは次のステップへの契機としてのものであった。手段としての〈民族〉という仮設的枠組は、〈民族〉を超える視座を持っているゆえに、そこでは民族的自覚を呼び起こす。そしてこの自覚はまた、それを契機として〈民族〉を超えるものに止揚されるとき、民族的なものは複合的に解消される⁵⁾。

イスラエルは40余年前、パレスティナの住民を排除して奪った土地を領土として建国された。そして残余の土地を20年余占領下においている。放逐され、占領下におかれたパレスティナの民衆は、好むと好まざるとに拘らずこうした状況の下で自らのアイデンティティーを鮮明にせざるを得ない立場に立たされたのである。シオニズムという政治イデオロギーを礎としたイスラエル国家の誕生自体が、この地の住民に〈パレスティナ民族〉という仮設的枠組を解放のための手段として選択させたのである。ヨーロッパ近代において、ユダヤ教徒がユダヤ民族となっていくように、政治的単位としての〈パレスティナ民族〉が創られたのである⁶⁾。

これまでパレスティナ解放運動の理論的支柱は、概して西欧的概念に基

づくものであったが、インティファダの主役であり組織的中心として活躍しているのは、イスラーム・グループである。どちらかといえば西欧的論理に基づく指導部と、イスラーム的心性に根づいている運動主体の間に事実上若干の矛盾が存在していることは否めない。ただしはっきりしているのは、主役が今まで姿を見せなかったイスラーム系組織であるという点であろう。奇妙なことにこれに関して、欧米系の諸文献はほとんど触れていないというのが現状である。

II

近代国家誕生よりわずか200年足らず⁷⁾の今日、すでにヨーロッパでは〈民族国家〉の終焉が囁かれている⁸⁾。

フランス革命により新しく創出された市民社会は、それまでの封建社会に対して理念的に生み出された社会である。それは共同体的、かつ自然発生的属性を有するそれまでの関係論的な人間のあり方を捨象し、自由、平等な独立した諸個人により形成される社会という理念に基づいて創出された。封建社会の理念的対立物として登場した市民社会は、それまで地縁あるいは職能的な結合関係で成立していた社会を否定し、さらに自然発生的属性を持つ共同体の成員の、例えば性別、腕力等の万別を否定して、市民という新たな属性を持つ個人一人一人を直接的に国家に結びつけた。フランス革命は、確かに封建社会のしがらみから個人を解放したのではあるが、この個人の解放とは、例えばホブズという〈自然状態〉における人間の不断の戦争状態を克服するための社会契約の下でなされるものであった。諸個人は国家と契約を結ぶことにより〈社会状態〉（法による統治）を実現し、はじめて非敵対的な形で諸個人の持つ〈自然権〉を享受することができ、自己保存が可能となると考えられた。したがって個人の持つ自然権

を基本原理として、諸個人は社会契約を結び、彼らにより形成されるのが国家である⁹⁾。個人を国民として直接的に国家に結びつける原理がここに誕生したのである。この原理は、国家の成立、国法の定式化を導き出し、法の下での平等な市民からなる国家=民族国家を生み出した。主権者たる平等な市民を構成員として成立し、社会契約により主権の行使者となった近代国家という概念は、近代ヨーロッパで考え出され、はじめて現実のものとして具体的存在となったのである。

ところでフランス革命が制度上の革命にとどまらず、西欧世界の政治理念上の革命でもあったといわれるゆえんは、人民主権の原理を打ち出し、それまでの国家観を根本的に変えたからである。啓蒙思想にその緒を置く人民主権の理念は、民族的相違のうちに新しい重要性を認める見方と結合することによって、それまで歴史的事実として存在していた民族国家を、理念の対象とするに至ったのである¹⁰⁾。

歴史上、多かれ少なかれ文化的統一体として存在した国家もあり、また文化的に多様な要素から成りたつ国家も存在した。民族国家はそれまで何世紀にもわたって存在していたのである。しかし政治的単位としての国家と、文化的単位としての民族との間に必然的な関連は存在しなかったことを、歴史は証明している。国家とは法的な領土概念であった¹¹⁾。一定の領土を支配する者は領主であり、その地は領地であった。

〈ネーション〉は、近代的用法では一般に政治的国家の意味であるが、近代以前にはこの語は非政治の意味できわめて広範にわたる地域で用いられていた¹²⁾。民族とは共通の政治的紐帯あるいは熱望の有無に拘らず、言語もしくは文化の共同体をさしていたが、フランス革命はこれら二つの要素を単一概念へと結合させ、〈民族国家〉を新しく誕生させたのである¹³⁾。

ところで一般にヨーロッパにおいては、民族を「集団の生存意志」の結果とみなす傾向がみられる¹⁴⁾。近代国家の理論的基礎を提供したルソーは、個々人は自由な選択によって自己の意志を自発的に一般意志に一体化させ

るとして、民族国家を単なる政府の権威以上のものによって結合された共同体であるとした¹⁵⁾。こうした考えは、民族が集団の生存意志の結果として導き出される共通意識を有するという観点から、文化的共同体は共同体成員との社会契約による主権の行使を委ねられる政治的共同体、つまり国家と一致するという結論を抽き出した。ここに〈民族国家〉の成立基盤が準備されたのである。

フランス革命により誕生した新たな〈市民〉は、一つの〈国民〉（ネーション）として同一の言語を用い、同一の国籍を有し、同一の法の支配のもとに置かれる存在となったのである。しかしながら法の下での平等な市民からなる〈民族国家〉も決して一挙に貫徹された訳ではない。例えば革命期にフランス語を話さない市民は、全人口の三分の一近く存在していたし、19世紀後半をすぎてもなお五分の一はオック語やブルトン語を母国語としていた。フランス共和国は近代世界でもっとも完全に統一された〈民族国家〉の一つと考えられているが、それでもいくつかの民族を包含している。フラマン人、プロヴァンス人等はほとんど同化したか、バスク人やブルターニュ人は今日なお容易に識別できる¹⁶⁾。これらの民族はすべて以前には自律した国家を形成していたのである。

ところで民族を文化的概念で捉えるならば、言語共同体、言語の共有をあげることができよう。〈民族国家〉は、支配的な民族語による地域的あるいは少数民族の言語の吸収、征服によって形成されたともいえよう。そしてそこに〈ネーション〉という理念が生み出されるのであって、単に国家の構成員が国の民なのではない。言語的統一が成立することが〈民族国家〉の前提条件なのである。そしてこの言語的統一のために公教育の普及が国家事業としてなされる。同時に〈国民〉の受益者意識の形成のために、選挙法、労働法等の制度及び改正を通して諸制度の整備が行われたのである。また鉄道網の整備による人的、物的、情報交流の促進も、〈民族国家〉形成にとって重要な役割を演じた¹⁷⁾。

ヨーロッパに誕生した〈民族国家〉は、必ずしも一様ではなかったが、ほぼこのような過程を通じて形成されていった。フランス革命は封建制を倒して、その理念である市民社会を創出したのであるが、市民としての個人の解放は、固有の法及び自治権の放棄を通してのみ達成されるものであった。国の中の国としての存在は否認され、フランス共和国の住民はフランス国民（ネーション）となることを条件として解放されることになる。

ここでフランス国内の少数者であったユダヤ教徒についてみると、彼らは民族的同化を条件としてのみ解放されることになる。ナポレオンは律法の非ユダヤ化を推進し、異教徒との婚姻の正当化等の措置を通じてユダヤ教徒の同化政策を推し進めた。このことは支配的民族への同化、屈服を前提とする国家形成が行われたことを意味するものである。したがって近代国家のスローガンである「自由・平等」はしよせんナショナルな枠内でのものにすぎなかった。しかし反面では同時に国家理念の人民主権の論理は、同化をよしとしない国民に〈民族国家〉形成の権利、民族自決権を認めるという帰結を伴ったのである。

中世以後の「帝王神権説」は、フランス革命によって致命的打撃を受け、「人民神権説」にとってかわられた。人民は一個の全体をなし、国民と呼称されて主権者となり、国家と一体となったのである。人民が自ら憲法を作成し、自ら独自の政府を選ぶ権利を有するという革命理論は、国家形成の主導権を政府から人民に移しかえることを含意するものである。それまでの歴史上、上から政府の手によって築き上げられてきた国家は、これ以後下から人民の意志で作られることになる。また理論的には一方で、人間は生来平等であるとする18世紀の啓蒙思想に源を持つ民主的原理から生じた人民主権の理念は、同質性を必然的に仮定するが、他方で民族は互いに差異性を持つものであると前提されるのである。したがって複数の民族で構成される国家には、民主的原理にとり必要とされる同質性は存在しないことになる。ここから民主的理念の実現は、民族的に統一された国家に

おいてのみ可能であるという主張が導き出される。民主主義の原理である自由、平等が、近代国家秩序のもとでの同化＝解放路線において、現実にはいかなるものであったかを物語る出来事の一つが、1894年のドレフュス事件であった。

III

シオニズムがヨーロッパ近代の落し子として、厳密な意味での民族運動として展開されたことは意味深いことである。

近代政治シオニズムの始祖といわれるヘルツルの出発点は、彼の眼前で展開されていた反ユダヤ主義の現実であった。よく知られているように、彼はジャーナリストとしてドレフュス裁判を傍聴し、ユダヤ人であるという理由により不当な扱いを受けるという現実に強いショックを受けた¹⁸⁾。彼はユダヤ人問題が民族問題であるという結論に達し、全世界に散佚しているユダヤ人は一つの民族なのであり、また反ユダヤ主義は決して消滅せず、永遠に存続するものであると確信した¹⁹⁾。したがって問題解決のための必須条件は、民族国家樹立以外にはありえないと主張したのである。つまりシオニズムの論理は、「永遠の反ユダヤ主義」を想定し、環境世界への同化の不可能性に根拠を置くものであった。

ところでM. ウェーバーは、ユダヤ人を「客人民族」とであると規定している²⁰⁾。要約すれば他民族が支配する地域の中で、その保護を受けて少数民族として自らの共同体を維持している〈民族〉ということである。さらに客人民族とは、自らが占拠する地域、国土を持ちえない〈民族〉でもある。ところで近代ヨーロッパに誕生した民族国家は、その固有の世界史的意味から考えて、自然的条件として自らの国土を不可欠の条件としている。しかしユダヤ人は客人民族である限り、国土を持たず、したがって反ユダヤ

主義という現実を民族問題として解決するための前提を欠いていることになる。そこからユダヤ民族の解放が民族自決を通してのみ実現されるとするシオニズムの論理の整合性が生み出されるのである。このさい国土を持たない客人民族であった彼らが第一に着手しなければならなかったことは、民族自決の基盤としての国土の獲得であった。

フランス革命により新たに創出された市民社会は、市民という平等、独立、自由を獲得した個人をその成員とする社会である。人間の自然的属性、民族、人種、宗教その他もろもろの差を捨象し、市民という新たな資格が全成員に付与されたのである。解放は無限の差異性を必然的に担っている諸個人の差別からの解放でもあった。ユダヤ人は、ユダヤ性を捨て去る度合に応じて解放されることになる。ヨーロッパにく民族国家が誕生してくると、各国において一般のユダヤ人の当該国の文化的環境への同化は著しく進行したのである。しかし個人の解放は結局は主要民族への同化としてからめとられていったため、逆にユダヤ人解放運動も進められていくことになる。またこれに呼応して反ユダヤ主義も形成されていった。

ヨーロッパにおける民族国家形成は、大きく分けて二つのタイプ、つまり英・仏の場合と、独・伊の場合がある。前者は、近代国家形成にさいし、言語的統一を計り、諸制度の改革、整備を行って国民の受益者意識を形成して、そこから制度としてのナショナリズムを生み出した。これに対しドイツやイタリア等は、国家的統一と近代国家創出の問題を同時に抱え込んでいた。これらの地域では、国家的統一へ向けての運動が強力であり、〈運動としてのナショナリズム〉が展開されたのである²¹⁾。フランス革命によってユダヤ民族主義がフランス民族主義に屈服することにより同化したユダヤ人は、制度としてのナショナリズムにからめとられていった。しかしドイツの場合をみると、ビスマルクが政権の座につくとそれまでの自由主義的傾向を阻止する政策を採用し、反動的勢力との結びつきを強めた。この潮流は「チュートン民族の優越性の擁護」にまで発展し、〈運動として

のナショナリズム〉は一段と尖鋭化していった。反ユダヤ主義となって拮がった潮流は、ドイツ国内にとどまらず、オーストリア、ハンガリーにまで飛び火し、暴動となって荒れ狂った。そしてフランスさえもこの波を避けることはできなかった。イスラエル国家の基本原理、シオニズム誕生の契機となったドレフュス事件は、このような状況の下で起ったのである。

〈民族国家〉誕生以前は、ユダヤ人の分離主義つまりユダヤ教徒としての差異性の保持、強調が、非難、攻撃の的とされたが、〈民族国家〉誕生以後は、同化したユダヤ人の商工業、自由業への著しい進出が脅威となり、ここに反ユダヤ主義は〈民族〉の枠を強固にし、他民族蔑視、民族対立として立ち現れてくる。

ナチス・ドイツが極限にまで推し進めたユダヤ人迫害は、他民族蔑視となって現れる〈選民〉意識、自民族（アーリア民族）の優越性の誇示の到達点でもあった。そして前世紀末から今世紀にかけて顕著な現象であった反ユダヤ主義に抗して掲げられたシオニストによるユダヤ民族解放もまた、〈民族〉の枠を強化して闘われた²²⁾。民族解放のための国家樹立は、必然的にきわめてナショナルであり、ユダヤ民族のみの解放を意味したため、当然の帰結とはいえ〈民族〉という枠組を超える視座は完全に欠落している。〈土地なき民に民なき土地を〉のスローガンの下に、パレスティナの地をユダヤ民族の国土と設定して国家を樹立したシオニストにとって、パレスティナは民なき土地としてとり扱われざるを得なかった。以後久しい間、イスラエルがパレスティナ人は存在しないと公言してはばからなかったことは記憶に新しいことである。そしてイスラエル最高裁判所が、「イスラエル国民とは、ユダヤ人以外にはありえない」との判決を下したのは、ほんの数年前のことである。

1948年のイスラエル建国以来今日に至るまで、イスラエルは一貫して自国が厳密な意味での〈民族国家〉であることを内外に誇示してきた。

ユダヤ民族の解放をスローガンに掲げ、土地なき民に土地を獲得して国

家樹立を達成したシオニストの論理は、世界史的文脈と無縁ではありえず、したがって一定の限定的状況下で構築されたという宿命を負っている。その限りにおいて近視眼的であり、囲い込みによる自己主張をせざるを得なかったといえよう。しかし〈民族〉に固執するあまり、それに基礎を置く国家はきわめて排他的、独善的たらざるを得ず、閉ざされた国家とならざるを得ない。近代国家誕生後2世紀足らずで、すでにく民族国家〉の枠組があちこちで緩み始めている今日、近代ヨーロッパの落し子として、その忠実な継承者であり、かつ実践者であるイスラエルは、インティファダのつき上げにより〈閉ざされた国家〉の見直しを迫られている。

すでにヨーロッパにおいては、92年を目指してEC統合が推し進められている。当面のゴールは経済統合ではあるが、一部では「近代国家の終焉の始まり」²³⁾との予言も出はじめており、〈民族国家〉の解体と、民族の棄揚が今日的課題として浮上してきている。われわれは今や、既成の国家概念の脱構築を迫る国際化の時代を迎えているのではあるまいか。

IV

初期イスラーム共同体は一つの歴史的事実であるが、同時にウマイヤ朝以来今日に至るまでの長い年月にわたりムスリム達が絶間なく追求してきた理想の国家像であることは、よく知られている。イスラーム国家について論じたマーワルディーによれば²⁴⁾、国家の真の任務は、公正と真理の実現にある。悪を善に、悪徳を美德に、忌避されるものを是認されるものに変えるような体制を作ること、これが国家の役割である。そのために必要なことは宗教を保護し、政治的絆を強固にしなければならない。イスラーム的観点に立てば、宗教と政治は不可分であるゆえ、一方の強化は他方の力を増強するといったかたちで、相乗効果をもつことになる。

イスラーム国家とは、その政体がいかなるものであれイスラームの原理に基づいて統治されることを前提としている。イスラームの原理とは要約するならば、タウヒードを基本とするものといえよう。タウヒードとは一に化することを意味し、まず神を一と措定することにより唯一神論の基礎となると同時に、その手になる被造物すべてを一とみなす。宇宙の全存在は多種多様であるが、一なる神の創造にかかるゆえに、存在の価値としては一、つまり等価である。イスラームの五行の一つである信仰告白「アッラーの他に神はなし」という証言は、神の唯一性を肯定するにとどまらず、以上のタウヒード的世界認識とその存在論の受容をも含んでいるのである。

一から発する多は、等価の存在として一に収斂される。このような考え方は当然のことながら、多様な個別的存在の差異性を神与のものとして肯定する。社会的次元でいえば、性質、力能等の点でさまざまに異なる人間は、それぞれの差異性を前提として共生、共存すべき存在である。万象、万物を等位におくタウヒードを基本原理として構築されるイスラーム国家は、したがって異質なものの本性を否定せず、その抑圧を許さない。換言すれば、この国家はそもそも異質な人間の集団であることを自明のものとし、その差異を前提として成立し、運営されるものとみなされる。そのさい重要なのは何よりもタウヒード性である。したがってイスラーム国家の長は、タウヒード性の昂揚、維持に努めるムスリムであるとされるのは、理の当然であろう。

シャリーア（イスラーム法）は、国家の長が自らの任務を遂行するための道具であり、イスラーム国家を成立させる法的基礎である。国家の長の正当性は、シャリーアにたいする彼の忠誠度によって計られ、民衆はその度合に応じて国家の長にたいする自らの忠誠の度合を増減させる。ムスリム同士の間統治、臣従の関係の基本は、このように統治者のシャリーアにたいする忠誠さ、遵守の度合によって規定されるのである。この関係は、ムスリム対非ムスリムの場合にはシャリーアのタウヒード性によって保証

されることになる。

イスラームの世界観の根幹となるタウヒード、その理念を公私にわたり規定するシャリーア、独自の法体系でありかつ固有の社会構成理論であるシャリーア的具体化としてのウンマ・イスラーミーヤ、この三つはイスラームの基本構造をなす三つの極である。この三極構造から、独自の個のあり方、公共性のありようが生み出される。そこでは個は、他者から完全に切離されたかたちで顕現することではなく、つねに他との関係性の網の目の中に位置するのである。さらに差異性を神与のものとする認識から、共同体の構成員の多様性の承認が導き出される。非ムスリムといえども、イスラームに敵対しない限りは、これまた神与の本性、力能の自由、自然な開花を保証される。彼らは異分子、外なる者としてではなく、構成要素として共同体の一部を成す存在である²⁵⁾。

これまでの概略で明らかなように、共存の概念は当該地域の人々の共有するところのものである。ムスリムだけではなくキリスト教徒もその他のズィンミーも同じく共有するものを持つというところに、中東的特性がある。ただしこの種の共存の概念を理論的に提供しているのがイスラームなのであり、とりわけウンマ概念なのである。それゆえあえてイスラームの原理にまで遡及して強調するのであって、ただ単なる神さま信仰としての宗教をこの社会の基底として強調しているのではない点をつけ加えておこう。

西欧においては前述したように、フランス革命を契機として民主的理念が醸成され、独自のコンテクストで自由、平等が追求され、種々の制度を生み出していった。しかしそれらはしばしば内なる者、多数の者、あるいは主要メンバーにのみ適用される理念の制度化として機能してきた。しかしイスラーム世界では、これとは異なったコンテクストで異質の民を例えばアラベスク模様の如くに共存させる機構が存在し、実効を上げてきたのである²⁶⁾。

V

ここでは、前章を受けてイスラーム共同体の理念が、中東のモザイク社会と言われるシリアにおいて、どのようなレベルで認められるのか、その場合いかに機能しているのかについて若干の考察をしてみよう。

周知のようにシリアが独立した国家としての歩みを始めたのは今世紀も中葉のことである。紀元前 2500 年にまで遡るといわれるシリアの歴史は、数多の外部勢力による支配の変遷史でもあった。この地が独立国として一支配者に統治された時期は、1945 年に至るまでの長い歴史上ほとんど見当たらないといわれるほどシリアの地は、多くの支配者に服し、またさまざまに分割されてきたのである²⁷⁾。文字通り文明の十字路であったシリアの歴史は、人種、宗教、言語等の多様性を横糸として織りなされてきた。聖書時代から主としてセム系の人々がこの地に多くやってきたため、セム系の宗教及び言語を発展させ、かつシリア化していった。また紀元前 6 世紀から紀元 7 世紀までの時期に、三つのアラブ王国が砂漠と接する地域に成立している。アラビア半島からやってきた彼らは、シリアにアラブ文化の足跡を遺したのである。7 世紀にアラブ・ムスリムにより征服されたシリアは、前二者の蒔いた種を継承し、かつイスラーム性を継木することにより、見事な花を開花させたのである。

第二代カリフ、ウマルの時代にシリアはイスラーム勢に征服され、イラクと共にイスラーム共同体の版図に入った。征服にさいして和議に応じ、戦闘行為に参加しなかった者は、信教の自由、生命、財産を保証され、協約の民(アフルッ=ズィンマ)として共同体の一員となった²⁸⁾。このことはアラブ及びイスラーム世界への恒久的統合を意味し、シリア史の一大転換期を画する出来事であった。大多数の者にとっての言語はアラビア語となり、宗教はイスラームとなっていった。しかし歴代王朝(ダウラ)の下で、非ムスリムとしてとどまった者の数も決して無視しえないものであ

た²⁹⁾。

ところでシャリーアが法体系化したのは8世紀から9世紀にかけてのことであるが、その時点ではすでに征服者、被征服者の区別は実態としてもはや存在しなかったため「協約の民」は通常庇護民と訳されるズィンミーと呼称されたが、この語は法理論上の一つ概念となっていた。そして各時代、各地域における非ムスリムの生命、財産の安全と、信仰の保持を保証する法理念として確立し、制度化された。

イスラーム共同体がズィンミーに保証する諸権利の個々についてここで言及するいとまはないが、司法、自治の観点から若干の検討を加えてみることにしよう。共同体の構成にあたりズィンミーを異人として外側に排除することなく、内なる特異な要素としてつつみ込むイスラーム共同体においては、その構成員が享受している生命、財産、名誉等の基本的事柄に関して、ムスリムとズィンミーの間に権利上のいかなる差別も存在しない。この観点から例えばズィンミーの血は、ムスリムのそれと同じくかけがえないものとみなされる。

イスラーム共同体の運営、維持にあたり、社会秩序保持に必要な事柄に関しては、ムスリム、ズィンミーの別なく同一の法が適用される。刑事事件、姦通に関する偽証等において同じ法が適用される。ただし飲酒、姦通等ムスリムに適用される法に関しては、各宗徒集団の法に委ねられる。

自治権に関しては、各宗徒集団がそれぞれの宗教上および各小共同体の運営に携わる長を選出する権利を有したのである。アッバース朝以降、各宗徒小共同体に自治権を付与し、その長と交渉するといった方式が長らく踏襲されている。そしてこれは15世紀のオスマーン朝、メフメト二世の時代に制度化されることになるミッラ制にまでつながるのである。

イスラーム世界の只中でそれぞれの宗徒集団が現在に至るまでの長い期間、彼らの小共同体を維持、継承しえたことは、以上の簡単な概要から明らかのように、シャリーアに基づいて保証された基本権に立脚するもので

あり、何ら驚くにあたらないことである。イスラーム世界においては、少数派であることが除外の理由にはなりえず、また近代西欧に興ったナショナリズムの洗礼を受けたにも拘わらず、シリアでは民族の名の下に分離権を主張する動きとなることもなかった。

シリアは多数の宗教集団が織りなすモザイク社会であるといわれる。ちなみにイスラーム各宗徒集団についてみると、スンニー、シーア・12イマーム派、イスマリーイー、アラウィー、ドゥルーズ、さらにスンニーではあるがクルド人といった具合に分れ、キリスト教では、ギリシャ正教、ギリシャ・カトリック、カトリック、シリア正教、プロテスタント、アルメニア正教等の小共同体が存在している。

近代に入りヨーロッパにおいて、民族主義の潮流が次々に〈民族国家〉形成を促すようになると、中東地域にもその強い影響が現れて、ワタニーヤ運動が展開されることになる³⁰⁾。

第1次大戦でオスマーン帝国が連合軍に破れると、その版図の大半は英仏の占領下に置かれることになった。アラブ・ナショナリズム運動は、この時期に大国による支配に対する抵抗運動として、異なった背景と思想傾向を持つ人々を民族の独立という旗の下に結集して展開された。この民族という用法が、この地域の人々にとりアラブを意味したことは、当時の状況では当然の成りゆきであった。独立とアラブの統一は、外国の支配下に置かれ、分割されたアラブ民衆にとって運動を進める強力な原動力であった。とりわけシリアは、多様な小共同体の存在を抱え、共存の長い歴史を誇っており³¹⁾、さらに支配権力の度重なる交替の経験は、彼らに同質性の志向、中央集権の一点集中ではなく、異質性との関わり方と、それらとの共生、共存を自然の成りゆきとした。また地元出身者を支配者として戴くことの稀だったシリアの民衆は³²⁾、時の権力におもねることなく、自らの権利を擁護する術を学んでいたように思われるしたたかさをも持ち合わせていた。同時にイスラーム性の度合に強弱があったとはいえ10数世紀にわ

たるイスラーム的国家体制の中で、共同体のあり方の公準は、ルーズであったにせよほぼ守られていた。

近代ヨーロッパの帝国主義的勢力による支配は、伝統的な共同体のあり方に対してのみならず、タウヒード的世界観に基づく社会構成ならびにその構造自体に対する攻撃であり、それを突き崩すものであった。さらに近代ヨーロッパが生み出した生成発展理論に基づく歴史的時間の解釈を背景にした占領及び委任統治は、シリアのみならずイスラーム世界の各地で執拗な抵抗を惹き起したのである。

第三世界におけるナショナリズム運動が、西欧によって押しつけられた政治的分割の線にしたがって〈民族国家〉形成へ向う傾向があったことは、周知のことである。アラブ民族運動が、シリア人、イラク人、エジプト人といった民族運動に分れ、のちにそれぞれが独立を達成し国家を形成していったのは、政治的分割の線に呼応せざるを得なかったことを示している。

ところでワタニーヤ運動がカウミーヤ運動へと転換するさいの推進力となり、アラブの統一という明確な方向性を示したのは、シリアにおいてであった³³⁾。確かにアラブは共通の言語と宗教を有し、歴史的、文化的に多くのものを共有しているため、統一への土壌はすでに準備されていたといえよう。しかしアラブ統一を強力な政治的手段にまで鍛えあげ、有効なものとしたのは、シリアに誕生したバアス党によってであった³⁴⁾。1940年から41年の時期に、バアス社会主義の創設者ミシェル・アフラークは、「アラブ統一、自由、社会主義」の三つをその目的に掲げている³⁵⁾。カウミーヤ運動のその後の拡がり、中東世界の域内政治構造を示唆する一つの例といえよう。シリアの置かれた地政的状况とあいまって「シリアを征する者はアラブを制す」³⁶⁾といわれる東アラブの中心地での展開は、アラブ民族主義運動を中東世界全域に波及させたのである。その結果各地で〈民族国家〉の誕生がみられることになった。

VI

第2次世界大戦以後今日に至るまでの約半世紀に及ぶ期間、中東地域では紛争の絶える間もないほどである。そして紛争の原因として、この地の人々の西欧型近代化の対処能力の欠如をもっぱら指摘する分析がまま見受けられる。たとえば中東地域の変動は、膨大な石油収入の結果増大した貧富の格差や、急速な近代化がもたらした伝統的なイスラーム的生活様式の解体といった国内矛盾に起因するものであり、これら不安定要因が戦争や紛争の恒常化を招き、既成国家の枠組の相対化をもたらしたというような見解である。原因はもっぱら国内矛盾にありとするこうした視座には、中東世界の本質的な固有性に関する理解が欠落している。ここ数10年の急速な近代化の流れがこの地域に強い影響を与えたことは否めないが、本質的には、この地の変動、不安定要因はほぼ中東全域に20世紀中葉に入って初めて成立した〈民族国家〉という枠組が、民衆の心性と親和しないところにある。

パレスティナ国家樹立についてみるならば、この国家を既成の近代国家の枠組、つまり〈民族国家〉への第一歩として把えることは早計であるといえよう。まず国家樹立宣言に至る状況をみてみよう。PLO指導部の国家樹立の宣言を実質的に支える解放運動の新しい段階であるインティファードは、歴史的、状況的制約の中でとりあえず、「民族運動」として位置づけられ発展してきたとはいえ、それは元来〈民族〉の枠組では規定しえない解放運動であるといえる。これは民族を巻き込んだ運動ともいえようし、民族という識別、あるいは用語が意味をなさないともみなしうる運動、「被抑圧者」の解放という用法が適切であるような運動として把え直されなければならない。これは〈民族国家〉の線引で排除され、差別、弾圧の対象とされた人々、被抑圧者たちの民衆運動なのである。したがってインティファードは決して一過性の蜂起ではなく、数10年に及ぶ民衆の日々の

被抑圧体験に裏打ちされた抵抗であり、彼らの心性、あるいは尊厳に長らく加えられてきた暴力的侮辱に対する断固とした反抗の決意のあらわれとみるべきであろう。それゆえこの解放運動を民族解放として規定することは厳密さを欠き、同時に問題の本質を隠蔽することに通じる。

パレスティナ解放運動が民族運動であるという主張は、シオニズム運動の対項として位置づけることを意味する。結局この論理はユダヤ対アラブ、ユダヤ教対イスラーム、歴史的抗争・対立という構図を相も変らず描き出すことで問題を単純化すると同時に、本質を曖昧にすることに役立つものとなろう。それはさらに民族自決の名の下に際限ない細分化を促進する契機を準備する。異なった民族、文化を数多く抱える中東世界には、変化、変動を惹起する要因にはことかかない。この地の安定を保証するものとしては異質性の共存をおおらかに受入れる人々の文化的心性が存在したが、上述のような思想は結局そのような心性を変形させ、この地域の不安定性の恒常化に役立つばかりなのである。己れの民族性の主張の背後には民族的名誉の意識が存在する。ウェーバーの指摘するように「自らの習俗の優越性と他の人々の習俗の劣等性の確信、それがエトノス的名誉の意識を与え」、その意識が選民思想をかくし持ち、民族的対立に導くのである³⁷⁾。

ところで先に触れたように、被抑圧者の解放であるインティファードは、民族対立の芽を内包する民族の主張を超える視座を持つ。イラン革命で一躍世に知られるようになった「被抑圧者の解放」について、その意味するところはあまり知られていない。被抑圧者の語源〈ダアファ〉は弱いこと、つまり弱さを意味する。したがってムスタダフィーーンとは弱き者、つまり信仰弱き者であり、転じて弱きゆえに抑圧にさらされている者の意となる。ところで弱さを克服し、信仰を強固にし努力すること(ジハード)、ウンマに向けられる内外からの攻撃にたいするジハードを行うこと³⁸⁾、これが被抑圧者の解放である。

パレスティナの解放運動をイスラーム的タームで捉えれば「被抑圧者の

解放」、一般的用法を用いれば「民衆運動」として位置づけられよう。この地がアラビア語圏であり、イスラーム文化圏のほぼ中心部に位置し、かつその歴史的意味を考慮に入れるならば、民衆の心性の土壌がいかなるものであるかは想像にかたくあるまい。彼らのめざす国家像についてもこのコンテキストで捉えられねばならないのである。

1987年12月以来三年目を迎えてなお衰えをみせない占領地内の民衆運動は、厳しい状況に耐え、広範な草の根運動としてバザール商人、農民、ブルジョワまでも巻き込む抵抗を展開している。この新たな盛り上がりは、1936年の史上最長といわれたパレスティナのストライキを更新する持続性、柔軟性を持ち、強靱な底力を示している。広範な民衆の参加するこの運動は、占領政策のさまざまな弾圧的措置にも拘らず、地道な組織化と同時に制度化を推進する活動として展開された。救援活動、医療活動、教育、自給自足のための家庭菜園、住民の自治等々、きわめて柔軟かつ徹底的な自力による困難打開への動きは国家樹立宣言への確かな足どりであったし³⁹⁾、それを準備する足場でもあった。インティファダは、イスラエル占領支配に対する単なる蜂起、反乱以上のものである。それはパレスティナ民衆のこれまでのイスラエル当局への絶対的服従、あるいは占領政策の事実上の容認という態度への訣別であり、イスラエル権力から脱し新たな権力を確立するための移行のプロセスなのである⁴⁰⁾。インティファダの語根ナファダが意味する「ゆきぶりをかけて結び目を解く」とは、〈民族国家〉イスラエルの民族の主張を正当化する囲い込みの固い鎖目を解きほぐくと同時に、占領政策によるパレスティナ人封じ込めの包囲網の分断を目指すものなのである。

VII

中東世界における国家は、さまざまな局面でその超国家的性格の一端を垣間見せるが、このような性格を形成する要因としては、多くの原因が挙げられるであろう。その第一としてはまず、共通言語としてのアラビア語の使用があげられる。この広大な地域にはアラビア語の他にもトルコ語、ペルシャ語を母国語とする圏域があるが、基本的に重要な言語はアラビア語であった。アラビア語はそれを自らの言語と自覚する人々に共通の文化意識を与えたばかりではなく、政治意識の面でも特殊な一体性をもたらした。アラビア語を自らの言語と認める人々、アラブの政治意識は〈国家〉もしくは〈王朝〉（ダウラ）の枠組を超えるモメントを宿している。このようなアラブ意識は、その成立、構造の面でイスラームとは切っても切り離しえない側面をもっているが、とにかくアラビア語の果たす役割は過少評価することはできない。

第二に挙げられるのは、イスラーム法の固有性である。前述したようにイスラームにおいては、宗教と法は同根のものであり、聖俗を二分する考え方は存在しない。ちなみに西欧キリスト教世界においては、聖とはあるべくしてあると認識され、俗との差異がきわめて明瞭である。教会は聖なる場所であり、現世における救済の機関なのである。教会は、神により保証された、現世とは明らかに異なる空間として認められる場所である。したがって信徒にとり教会の内と外は、聖との差異、聖俗を仕切る境界を意味する。他方イスラームにおいては、聖俗の差異は、はっきりと確立されない。マスジドは〈神の家〉（バイトッ=ラー）であると同時に〈人々の家〉（バイト・ン=ナース）でもある⁴¹⁾。またサラートはマスジドの内でも外でも行われる。サラートのさいの方角、キブラは神の居る方角を象徴するのみならず、神にたいして円を描くように形成されるウンマ、同一の方向に向って行為する人々という概念も同時に内包している。同一の方向、

つまり神を目指すことにより個も共同体も同時に存在の意味を確かなものとするのである⁴²⁾。サラートにさいしてと同様、日常生活においても、同一の方向を目指す個々の信徒及びその共同体にとっての指針、規範を示すのがシャリーアである。したがってシャリーアが宗教儀礼のみならず、日常生活、国家運営までにわたる広範な事柄を律する理由は明らかであろう。

個と世界を結ぶイスラームの三極構造——タウヒード、シャリーア、ウンマ——のネットワークは、中東世界に固有な精神の質、構造の組成にほとんど決定的な役割を果していると思われる⁴³⁾。それは地域に固有な思考方法のみならず、諸制度の構造、機能にまで深く関わるものである。

ところで自らの集团的差異性を強調し、その防衛、保護のみを主張して自らの周囲に高い境界線を張りめぐらし、囲い込みを徹底させる国家体制の維持に終始するイスラエルは、危機的状況が深化する事態に直面し、より一層の排他性、偏狭さを強めている。こうした現状においてイスラームの呈示する三極構造は、〈民族国家〉の限界を克服するための前提条件を準備するばかりでなく、その理論的枠組をも提供するものなのである。

本稿においては、〈民族国家〉を超える視座を内包し、超国家的性格を有する当該地域の文化性、ハビトゥスに照明を当てることにより、パレスティナ国家の性格について示唆してきた。このような観点からすれば、泥沼化して久しい現在のレバノン情勢は、その根源にこのような伝統的な心性、つまり共存の倫理を前提とする心性の破損と、〈民族国家〉の枠組の中で事態を解決しようとする囲い込み論理の強化の結果をうかがうことができるであろう。現在の各宗教共同体の確執、抗争対立の姿は、この新たな政治的パラダイムのもとらす当然の帰結と云うものなのである。

他方シリアを例にみるならば、その構成員にはレバノンと酷似する宗派小共同体を多く抱え、歴史的環境の点でも多くの共通要素を持っている。ところで両者がそれぞれの道を歩み始めたのは前世紀後半以後のことであり、〈民族国家〉形成以後の半世紀近い両者の著しい差異は、誰の目にも明

らかであろう。西欧で案出され、現実のものとなった〈民族国家〉を中東に継木した場合、その受容の如何により、その後の命運がかくも明瞭に分岐したことは注目に価する。

レバノンとシリアの現状は、中東における二つの可能性の差異を端的に示すものであろう。言語の統一、国境線の確定、中央集権的な国民統一によって創出される国民、市民の誕生。国法による全生活領域の拘束と支配の受容という西欧的発想によって建設され、中東におけるもっとも近代的な国家とみなされてきたレバノンではいま、各宗派間の抗争、対立の嵐が吹きまわっている。他方社会の全成員を関係論的存在とみなし、ウンマの領界を物理的空間で仕切ることをせず、異質性を所与のものとして受容し、異質の者が共同体理念をたがいに共有するかたちで一体性を確保する社会を形成する中東的なシリアが存在する。後者においては、国境線は領土の範囲を地理的に策定するというより、むしろ社会の成員のウンマ意識に基づくブロック化とみなすが、これら両者の国家概念の相違は大きい。後者が、現在集団の枠組として一応踏襲している〈民族国家〉は、それ自体で完結する形態ではなく、ウンマへと絶えず拡散し、連結していく一つの過程なのである。

中東の近・現代史が明示している航跡から明らかなように、前近代的帝国の衰退、植民地主義支配を経たのちに、この地域の民衆は民族主義運動を介して独立を達成したのちに、さまざまなかたちで〈民族国家〉を超克する試みを繰り返している。例えばリビアのカッザーフィーによる第三理論、イランにおけるイスラーム革命等にみられるように、中東独自の民族運動の系譜は、この地域のイスラーム的心性とでも名付けうるものの表明である〈被抑圧者〉の解放運動への転換を計りつつある。

たしかにアラブ民族主義運動は、アラブという枠組の中で展開された点で〈民族国家〉への道を進んだものであった。しかしすでに指摘したように、民族という仮設的枠組は、当時の状況下で前近代的な壁を突破するた

めに、また植民地支配からの解放の手段として歴史的に必要とされたものであった。当初ワタニーヤ運動として展開された解放闘争が、カウミーヤ運動に拡大、転化されていったことは、〈民族国家〉樹立が当面の第一ステップに他ならなかったことを示している。ここで成立した国家は、閉ざされた国家としての〈民族国家〉を一段階として、やがては実質的に開かれた国家、ウンマあるいはウンマの共同体へと移行する一過程として位置づけられる。イスラーム史における王朝（ダウラ）とは同時にかりそめのもの、移ろいゆくものを意味するが、歴代王朝にたいするこの歴史認識に呼応するものが、現代に成立した〈民族国家〉でもある。人々がかりそめのものを越えようと努める時、その先にメタ歴史的理念としての〈理想の共同体〉ウンマ・イスラミーヤの姿が想定される。

1988年に宣言されたパレスティナ国家は、被抑圧者の解放として闘いとられていくことになるであろう。たしかにパレスティナの解放運動には、ムスリムのみではなくキリスト教徒も同様に参画している。この段階で重要なのは彼らの宗教の違いではなく、むしろ共存、寛容の精神である。彼らの声明文あるいは主要文書では、とりたててイスラームについての言及はないが、これはムスリム側にとっては当然のことだからである。例えばさきに来日した折アラファートは、なぜイスラームについて言及しないのかという質問にたいし、「われわれにとっては至極当り前のことであるゆえに、特に言及する必要があるか」と端的に答えている⁴⁴⁾。こうした発言からも分るように、キリスト教、イスラームにとり共通分母として至極当然である事柄について、現時点であえてイスラームに言及する必要性がないゆえに表面にあらわれないにすぎないのである。

被抑圧者の解放として闘いとられていくパレスティナの国家は、閉ざされた国家から開かれた国家への、ナショナルなものからインターナショナルなものへの、ウンマ、あるいはウンマ的共同体模索の試みが、今端緒についたばかりなのである。

注

- 1) 近代に誕生した“Nation State”の訳語である〈民族国家〉あるいは〈国民国家〉は、いずれもその固有な意味内容を正確に表現することは困難であるが、本稿では一貫して〈民族国家〉の訳語をあえて用いた。
- 2) Jerome Segal, “Does the State of Palestine Exist?” *Journal of Palestine Studies*, vol. XVIII, No. 4, Summer, 1989, p. 15, p. 17.
すでに100カ国以上が承認したパレスティナ国家は、イスラエルの否認の有無に拘わらず原則的には国家として存在しうる。イスラエルによる主権の侵害という事実
は、国家の存在を抹消することを意味しない。
- 3) Wafik Raouf, *Nouveau Regard sur le Nationalisme Arab*, Paris, Editions L'Harmattan, 1984, p. 157.
- 4) J. R. Barues, *An Introduction to Religious Foundation in the Ottoman Empire*, Leiden, E. J. Brill, 1986 参照。
- 5) Bassam Tibi, *Arab Nationalism : A Critical Enquiry*, Lond., The Macmillan Press, 1981, p. 17.
- 6) E. W. Said, *The Question of Palestine*, Lond., Routledge & Kegan Paul, 1980, p. 117.
- 7) フランス革命200年祭におけるサッチャー発言にもみられるように、イギリスにおいては「ピューリタン革命」「名誉革命」の二つの市民革命により近代国家の時代を迎えたとされる。
- 8) フランスの拡大社会学研究所長で著名な社会学者、E. Morin の発言、Le Monde, 29 Mars, 1989.
- 9) ホップズ、水田洋訳『リヴァイアサン』I、岩波書店、1967年、第13-16章参照。
- 10) フランス革命以前には、国家を定義するさいに、共同体の紐帯も、直接的な意味での社会生活のあらゆる局面も何の役割も演じていなかった。1789年10月にフランスとナヴァール王がフランス人の王となり、民族国家は、その歴史の新しい段階に入ったのである。A. コバン、柴田卓弘訳『民族国家と民族自決』早稲田大学出版部、1976年参照。
- 11) Elie Kedourie, *Nationalism*, Lond., Hutchinson, 1960, p. 77.
- 12) E. H. Carr, *Nationalism and After*, Lond., Macmillan, 1968, pp. 1-2.
- 13) A. コバン、*op. cit.*, p. 28.
- 14) *Ibid.*, p. 128.

- 15) E. H. Carr, *op. cit.*, p. 7.
- 16) F. Braudel, *The Identity of France*, vol. 1, Lond., Fontana Press, 1989, pp. 85-103.
- 17) *Ibid.*, p. 18.
- 18) D. Vital, *The Origin of Zionism*, Oxford, Oxford Univ. Press, 1975, p. 243. ドレフュス事件を契機とする説は正確ではなく、むしろこの事件以前に、度重なる反ユダヤ主義の現象を目撃、経験していたことが、ヘルツルの日記により明らかであるという。
- 19) *Ibid.*, p. 262.
- 20) M. ウェーバー、内田芳明訳『古代ユダヤ教』II、みすず書房、1980年、529頁。
- 21) E. Kedourie, *op. cit.*, pp. 64-70.
- 22) *Ibid.*, p. 76.
- 23) E. Morin, *op. cit.*
- 24) Al-Māwardī, *Kitāb-1-'Aḥkām as-Sultānīyah*, ed. by R. Enger. Bern, 1853, ch. 1.
- 25) A. A. Kurdi, *The Islamic State : A Study based on the Islamic Holy Constitution*, Lond., Mansell Pub. Ltd., 1984, p. 57.
- 26) 詳細については拙稿を参照。
“An Analysis of the Network of Islamicity.” ’88年度国際シンポジウム“State, Community, and Regional Politics in the Middle East.”
「イスラーム世界におけるユダヤ人：共存、共生の歴史」広河隆一編『ユダヤ人とは何か』三友社、1985年。
- 27) D. Hopwood, *Syria 1945-1986 : Politics and Society*, Lond., Unwin Hyman, 1988, p. 13.
- 28) 拙稿「イスラームの共同体と共存の原理」『国際大学中東研究所紀要』III、1987-1988年参照。
- 29) A. A. Duri, *The Historical Formation of the Arab Nation*, Lond., Croom Helm, 1987, pp. 52-60 参照。
A. L. Tibawi, *Islamic Education : Its Traditions and Modernization into the Arab National System*, Lond., Luzac, 1979, p. 21.
- 30) B. Tibi, *op. cit.*, pp. 76-79.
- 31) P. Seale, *The Struggle for Syria*, Lond., I. B. Tauris, 1987, p. 65. D. Hopwood, *op. cit.*, pp. 8-12 参照。

- 32) *Ibid.*, p. 13.
- 33) A. A. Duri, *op. cit.*, p. 334.
- 34) P. Seale, *op. cit.*, pp. 103-105 参照。
- 35) *Ibid.*, p. 153.
- 36) *Ibid.*, p. 35.
- 37) 湯浅尠男「ユダヤ民族主義の構造」『現代の眼』現代評論社、昭和47年8月号参照。
- 38) A. A. Kurdi, *op. cit.*, p. 108.
- 39) S. Ramsden, "The Roots of Revolution", *The Middle East*, April 1989 参照。
- 40) J. Segal, *op. cit.*, p. 19.
- 41) この点に関してはユニークな研究を行った M. Ohno, *Masjid Reinterpreted: the Sacred and the Profane in Islam*, (IMES Working Paper Series No. 17) の分析を参照。
- 42) ハミードゥラー、黒田美代子訳『イスラーム概説』イスラミック・センター・ジャパン、1983年、99頁。
- 43) イスラームの三極構造の委細については以下を参照。
黒田壽郎「『以上ヲ欠ク』——スピノザの政治論を媒介としてイスラーム共同体の本性を考察する——」『国際大学中東研究所紀要』Ⅲ、1987-1988年。
黒田壽郎「初期イスラーム神学」岩波講座、東洋思想第3巻『イスラーム思想1』1989年。
Miyoko Kuroda, "An Analysis of the Network of Islamicity" *op. cit.*
- 44) 1989年10月2日、外務省国際会議場でのアラファート発言。

Concept of “State” in The Middle East: “Nation States” or “Ummah”

by Miyoko KURODA

The development of nationalist movements in the 19th and the 20th centuries, in the Middle East, saw the establishment of various nation states as a direct and indirect consequence. The states that were founded, borrowed the framework of the nation states of modern Europe and assumed aspects similar to those of nation states on the whole. Although the states established during this period were born as nation states in the context of world history, integration and coalition with other states within the region were aimed at from the beginning, and various movements towards that end, have continued to develop until today.

On the other hand, Zionism, which built its state, Israel, in Palestine as a fruition of its nationalist movement, has demonstrated inclinations which are quite contrary to those of the other Middle Eastern states. Israel has been consistently reinforcing its nation state framework and concentrating on the preservation of its extremely national character. In such a situation, the PLO has recently made the first step towards founding its own independent Palestinian state.

In modern history, the word ‘nation’ has been used to signify a political entity, but before that it was widely used in a non-political

sense as well. The nation indicated a community united linguistically or culturally, whether or not it had a common political bond. The French Revolution opened up a new phase in the history of the nation state, by combining these two factors into one single concept. The French Revolution overthrew feudalism and achieved its ideal, i.e. civil society, but this brought to the fore that only when indigenous laws and traditional autonomous institutions have been renounced, can the liberation of individuals as citizens be achieved. Therefore, the existence of a state within a state was denied and the people living in the Republic of France were liberated, provided they became citizens of France. For instance, Jews who were a national minority in France were so liberated on condition of their national assimilation. Thus the liberation of Jews could only be theoretically accomplished by assimilating with the dominant nation. As more nation states came into being in Europe, the assimilation of Jews into the cultural environment progressed greatly in each state, but because liberation of individuals had become confined to the assimilation of the minority into the majority, the French Revolution then was a major turning point, where the post revolutionary nationalism promoted a new type of violent anti-Semitism.

The Zionists stood up against anti-Semitism which had been prevalent throughout the latter half of the 19th century and into the 20th century. The liberation movement of the Jews countered this discrimination through reinforcing its own national framework. Thus the establishment of a state exclusively for Jews was naturally very national. So there was no possibility of going beyond the framework of the nation since this was aimed at the liberation of Jews only. When

too much stress was put on national-ethnic elements, the state inevitably became an extremely exclusive and closed one.

It is well known that the Islamic community in its early days was the "ideal" state that the Muslims have been trying to reestablish from the time of the Umayyads until today. Since religion and politics are indivisible in Islam, the reinforcement of the one would result in that of the other. This close relationship between religion and politics gives support to the idea that whatever its political form may be, the Islamic State should be governed by the principle of Islam. The tri-polar structure of three fundamentals of Islam: (Tawhid, Shari'ah and the Ummah), offers a very distinctive magnetic field in which appear typical Islamic characteristics concerning both the private and public life. There an individual does not appear as hermetically sealed and severed completely from others that constitute the community, but rather, he/she is seen as always having a positive and mutual relation with others. Moreover, perceptions that define disparities as God-gifted also give assent to the manifolds within the constituent members of the community. Therefore, the Islamic world has a social system that allows a mosaic of people with different qualities to co-exist and this system has still existed and proved effective.

When we look at the nature of the state of Palestine which the present Palestinian movement is trying to establish, we cannot estimate it as the first step for the creation of the authentic "nation state" in the strict political sense. The Intifadah which opened up a new phase of the Palestinian movement is for the time being defined as a "national movement" within historical and circumstantial limitations. However, it may be said that its true picture lies in the liberation movements

which cannot be defined within the framework of the “nationality.” It may be more appropriate to apply the term liberation of the “oppressed” (mustad’afun). Thus the Palestine liberation movement to liberate the oppressed has a view that goes beyond the national-ethnic contention that contains seeds of national-ethnic conflicts.

The tri-polar structure that binds and connects individuals to the world seems to have played an almost decisive role in forming the spiritual disposition and makeup which characterises the Middle Eastern world. It also has a lot to do with the structure and formation of various institutions as well as methods of thinking, characteristic to the region.

When we look at the history in this region, Arab nationalism took a path that led to a nation state in that it was developed within the framework of the concept of the Arab. The fact that the Wataniyyah movement was absorbed into the Qawmiyyah movement and converted into the liberation of the oppressed indicated that establishing a nation state was their immediate objective. The state that evolved therefore represented a passing phase which led to an Ummah, with the closed nation state serving as a stepping-stone.

Palestinians will have to earn their state through the liberation of the oppressed. They have just launched their Islamic endeavour to convert the closed state into an open one and its national character into an international one.